

伝承された洪水とその後の景観

——カオスからコスモスへ——

佐々木 高 弘*

I. 知覚地理学の災害研究

1960年代に隆盛した、知覚地理学(perceptual geography)は、心理学や文化人類学の研究成果を取り入れ、特に災害知覚・行動地理学・文化地理学・歴史地理学の分野において発展した¹⁾。その主な原因は、「なぜある文化集団が、その自然環境において、そのような事をしたのか」という問いに、環境がどのようなものであったかだけでなく、その文化を共有する人たちが、その環境をどのように知覚していたのか、私たちはそのことを知る必要がある、との要請があったからである。また、地理学史的には、もともとは文化を、人間の環境に対する適応戦略としてとらえる、文化生態学的研究の一思考に系譜を持ち、環境決定論や可能論に次いで出てきた、欧米の地理学の理論として、知覚地理学を捉えることも出来る²⁾。

なぜ、上に記した分野で特に発展したのかは、やはり、心理学や文化人類学に帰するところが大きいだろう。知覚や行動、あるいはイメージといった術語は、心理学から来たものである。人間は一人ひとり、世界を違って知覚している、との考え方は、私たちの五感から脳に至るまで、決して同じでないことからきている。またこの知覚におよぼす、私たちの経験も、一人ひとり違っている。そのことが、私たちの知覚を、さらに個性化する。またこの知覚には、文化的価値観や民俗慣習などが影響を与える。これらの知見から、歴史地理学は、異なる時代の、文化地理学は、異なる地域の、文化集団の地理的行動を理解するのに、その行動のもととなる、知覚やイメージを研究する必要性に迫られたのだ。

地理学の災害研究においても、この分野は早くから発展した³⁾。人々はなぜ自然災害の多発する地域に居住するのか、といった問いも、彼らはどのように自然環境を知覚しているのか、を知ることが必要となるからだ。ま

たこの災害の知覚研究は、歴史地理学とも結びついた。先にも述べた、環境への適応戦略としての文化、とも関連するのだが、環境の知覚のうち、私たちが居住地として場所を選定する際に、特に強く知覚する要素として、災害があると考えられた。そこで、ある時代の、ある地域の、ある文化集団が、自然災害の適応に、ある程度成功してきたことの過去の要因を、歴史地理学でも研究するようになった。一つは、自然災害に対して人間集団はどのように行動するのか、もう一つは、なぜ自然災害を受けやすい地域に、集落が長期にわたって存在するのか、それらの点を研究課題とした⁴⁾。

また以上の視点は、移住研究とも結びついた。なぜなら、ある文化集団が、移住するとき、どのようにその環境を評価し、新天地と定めていたか、ということが重要になるからである。特に農業作物と土壌や気候との関係は、災害知覚とも結びつく。特に北米においては、開拓時代の移住者の、自然環境の知覚のあり方に焦点が当てられた。多くの場合、移住者達は、実際の環境とは、異なる評価、見積もりを行い、居住地を選定していることが分かった⁵⁾。彼らはかつて住んでいた、風景に対する眼差しを、新しい環境でもイメージ化し、居住地として選定していたのだ。これら地理的行動も、彼らの環境知覚のあり方が、大きく作用していると考えられるのだ。

私たちは、異なる地域や時代の人々や個人について、つい私たちの価値観のまま評価しがちだが、地理学における知覚という概念の導入は、その過ちを、心理学や文化人類学の知見から、明確化した。と同時に、私たちの近代科学的合理主義に基づく環境知覚も、相対化された。そして近年の環境破壊は、歴史上、最も優位だと思こんでいた、この私たちの環境知覚の、様々な問題点を、逆に浮かび上がらせることにもなった。

* 京都学園大学人間文化学部

II. 神話伝承と環境知覚研究

これら知覚地理学から導き出された、結論をみると、一見、私たち人類は常に「誤った、あるいは歪んだ環境知覚」を繰り返しているように思える。私たちの信頼すべき科学にも問題はあった。何が正しい環境知覚なのかは分からないが、とりあえず言えることは、人々はその時代時代に、信頼すべき何かに基づいて、環境を知覚しているということだ。それが時間的、空間的、文化的外部から眺めたときに、初めて「誤った、あるいは歪んだ環境知覚」と評することができるのである。つまり私たちは、これらの部内者であるとき、なかなかその信頼すべき何かに、逆らうことは出来ないのだ。

さて、その信頼すべき何か、であるが、特定の文化集団には、色々なレベルで、その何かが存在している。そのなか、もっとも人々の行動を拘束するものとして、神話があげられる。

この神話研究も、文化人類学と心理学で行われている。神話とは、伝説や昔話と並んで、民間説話の一部をなしているが、それぞれは、それらを語る社会の人々との関係が異なる。昔話が虚構として語られているのに対して、伝説や神話は、本当にあったこととして語られる。伝説と神話の違いは、伝説は、語り手が真実性を主張する話であるのに対して、神話は、疑ってはならない真理として伝承されてきた。もちろんこの民間説話の分類は、部外者である研究者のものであって、語り手たちは、その違いにあまり気付いていない。せいぜいあるとしたら、嘘の話と本当の話、程度の区別である。

文化人類学はこの神話を、部外者であることを前提に、長くその社会に参加しつつ、できるだけ部内者の視点から研究しようとする。この方法を参与観察と呼んでいるが、彼らの成果によると、神話は、それを信じる社会の人たちの、様々な価値観や行動を支配しているようだ。マリノフスキーは「その社会の人々にとって神話は、儀礼的行動、倫理的行動、社会組織など、人々の実際の活動を規定する真理なのだ⁶⁾」と述べている。

一般的に、神話の内容そのものは、部外者であるなら、私たちにとってそれは荒唐無稽な話だ。だからそれを信じる人たちを、そこから助けたい、あるいはそれが無理と分かったら嘲笑、侮蔑する。異文化や、あるいは古代や中世の人々の行動を知ったとき、そのように思う人々は一般的に多い。場合によってはそれが、異文化摩擦を

呼び起こし、植民地時代や、現代にも通じる数々の不幸を生み出してきた。「知覚」という研究には、そのような過ちを正そうとする、思慮も含まれている。信頼すべき何かは、どの時代のどの文化にも存在しており、私たちはそれに頼って生きるしかない、ということ認識しておくことが重要なのだ。そして私たちにも神話があることを。このように人類学の研究成果が、社会的に注目を集めるようになると、かつての、神話といえば「荒唐無稽な」、という評価から、当該社会の人たちにとっては「紛れもない真実」、という評価へとかわる⁷⁾。

さて、未開社会だけでなく、私たちの近代的な社会でも、おなじような神話が機能している。そのことを指摘したのが、心理学である。心理学は特定の個人の異常な行動を、支配している原理を見いだそうとする。その時、この人類学の神話のアイディアが参考となった。ユングは、夢の内容や精神病患者の幻覚に、この神話に似た要素を見だし、心と神話との深い関係を主張した⁸⁾。「知覚」に焦点をしばって、心と神話の関係から見いだされた、興味深い考え方に「投射」という術語がある。「投射」とは、人の内的イメージやシンボルを、外部世界に押し出して、知覚することである。したがって、外部世界にある人やモノに、私たちは神話的シンボルを投射して見ていることになる。初対面の人を好きになったり、嫌いになったり出来るのは、あらかじめ私たちの深層心理に、人物に対する神話的イメージが存在し、そのイメージをその人に投射しているためだ、と言うわけである。新しい土地に出合ったときも、同じ知覚現象が私たちにも起こるかも知れない。

確かに、外部世界の「知覚」に際して、人あるいは人間集団は、それぞれ個性的である。その要因の一つに、神話的なものがかかっているというのだ。ユング派の心理学者、フランツは、人間は、未知の世界に接したとき、神話的シンボルを現実世界に投射する、と言う。そして創造神話はこのようにして生まれたのだと。その生成過程は、次のように想定された。人は見知らぬ土地に入ったとき、精神的、肉体的に危険な状況に陥る。それは自分のルーツを失い、新しい環境にも適応していないからだ。次に、その人は、見知らぬ土地を自己の所有と認識するのに、そしてこの混乱から脱するために、新しい秩序、つまり宇宙を創造する必要に迫られるのだ⁹⁾。この新しい土地への進入に際する、人の「知覚」のアイディアは、移民の環境知覚研究にとって、たいへん興味深い

指摘だ。

筆者は、かつて「新しい土地を開拓するとき」、「新しい権力を樹立するとき」に、人々はかつていた古い土地の神話を当てはめ、この新しい土地は、私たちが創造したのだと解釈していたのではないかと、という点を、日本神話を事例に、述べたことがある。移住するとき、かつていた古い土地の景観と似通った景観を、新しい土地に見立てて定着する。その時に、神話が人々の環境知覚に影響を与えていたのではないかと¹⁰⁾。

III. 世界の洪水神話

さて、その神話であるが、世界には洪水に関する神話が、非常に多く存在している。最も良く知られているのは、『聖書』創世記の「ノアの箱船」であろう。簡単に要約すると次のようになる。

その時代は、神の目にもあまるほど人々は墜落していたが、ノアだけは信仰心の篤い、正しい人だった。そこで、神は大洪水を起こし、人々をことごとく滅ぼそうと考えた。しかし、ノアだけには箱船を造り、家族とすべての生きものの雌雄一つがいつを乗せるよう指示した。洪水がまもなく起こり、箱船は水の上を何日も漂った。水が引き始めた頃、ノアは箱船から鳩を放った。ところが、休む土地のない鳩は、箱船に帰ってきた。さらに七日待って、彼はふたたび鳩を放った。すると夕方になって鳩は口にオリーブの若葉をくわえて帰ってきた。そこでノアは、水が地上から引いたことを知った。さらに七日後、鳩を放すと、もはや帰ってこなかった。そこで神はノアに、みんなが箱船から出るように告げた。ノアは神のために祭壇を築き、そこで動物の肉を焼いて捧げものとした。喜んだ神は、

もう洪水で人間を滅ぼすようなことはしないと約束した。箱舟から出たノアの子らから、全地の民が別れ出した¹¹⁾。

知覚地理学の災害研究から見て、興味深い点はいくつか上げられる。一つは、従来から人々が居住している場所で洪水が起こっている点、もう一つは、生き残った者が、次に居住する場所を選定している点である。もちろんその洪水の原因や逃れる方法、新しい居住地の見つけ方、新しい土地が安全である保障のあり方は、時代や文化によって異なる。が、彼らはそれを正しいと知覚し行動した。そこに知覚地理学の関心がある。

ところで、この著名な洪水神話は、聖書がオリジナルというわけではなく、メソポタミア、ギリシア、そしてインドや中国など、世界に数多く伝承されている¹²⁾。それら伝承には、おおよそ共通するパターンがある。話の筋としては、I「人間の墜落とそれに対する神の怒り」、II「神の怒りとしての洪水」、III「残った人間の婚姻」、IV「人間や種族、あるいは農耕等の起源」があげられる。そして、その他の付随的な要素として、a箱船、b鳥の役割、c欠如された要素、をここではあげておきたい。このように整理して、『聖書』を再度見てみると、[I神の怒り+II洪水+a箱船+b鳥+IV起源]となる。そしてIIIの婚姻が欠如することとなる。このような視覚から、世界の洪水神話を比較してみると、第1図のようになる。

このように、大筋は同じなのだが、欠如する筋や要素もある。欠如した筋や要素をどのように考えるかは、研究の視点によって異なるが、知覚地理学の視角から見るのであれば、洪水をこのように知覚した人々が住む、その地域や時代の文化的特性に焦点を絞ることになるだろう。

さて、日本にはどのような洪水神話が存在しているのだ

『聖書』	: I 神の怒り + II 洪水 + a箱船 + b鳥	+ IV 起源
メソポタミア ¹³⁾	: I 神の怒り + II 洪水 + a箱船 + b鳥	
ギリシア ¹⁴⁾	: I 神の怒り + II 洪水 + a箱船	+ IV 起源
インド① ¹⁵⁾	: II 洪水 + a箱船 + b鳥 + III 兄妹婚 + IV 起源	
インド② ¹⁶⁾	: I 神の怒り + II 洪水 + a箱船	+ IV 起源
中国① ¹⁷⁾	: I 神の怒り + II 洪水	+ III 神婚 + IV 起源
中国② ¹⁸⁾	: I 神の怒り + II 洪水 + a箱船 + b鳥 + III 神婚	+ IV 起源

第1図 世界の洪水神話の比較

ろう。『日本神話事典』によると、「洪水神話」は、次のように定義される。「原初に起こった大洪水のために人々が死んだが、その時に奇跡的に助かった一对の男女が現在の人間の祖先となった、というタイプの神話」で、この神話には「兄妹婚始祖型」があり、日本ではイザナキとイザナミの国生み神話となる¹⁹⁾。ところが、日本の神話では、肝心の洪水が欠如する。

先に、欠如した筋や要素は、地域や時代の文化的特性となる、と指摘したが、ヨーロッパの多くで欠如している、Ⅲの「残った人間の結婚」が、日本やインド、あるいは中国でも「兄妹婚」である場合が多い。これはおそらく、キリスト教社会でタブー視される近親婚が、欠如の原因となっているのだろう。しかし、洪水神話と呼ばれる伝承から、洪水が欠如している場合、そもそもその伝承を、洪水神話の範疇に入れてよいのだろうか。あるいは、日本には洪水神話が存在しない特異な地域なのだ、と断じるべきなのだろうか²⁰⁾。

そうではなく、欠如した筋や要素を、地域性の問題としてとらえるのであれば、洪水神話そのものの、話型分類の世界比較に終始するのではなく、洪水の多発する特定地域を想定し、その伝承を検証してみるという方法が有効かも知れない。つまり特定の神話伝承を軸に、欠如した筋や要素を検討するのではなく、特定の地域を軸に、そこで語られている様々な伝承を検討しようというのだ。

IV. 亀岡盆地に残る伝承

ここで事例紹介する京都府亀岡市の伝承群は、桂川の本流や支流が流れ込み、その水流が南部に集中する盆地にある。ところが、排水口は保津川が主で、しかも保津川は狭く蛇行しつつ峡谷を流れる。そのことが盆地内の排水を困難にし、遊水池を出現しやすい地形環境にある²¹⁾。つまり洪水が起こりやすい地域なのだ（第2図）。

このような環境に住む人々は、どのようにこの盆地を知覚していたのだろうか。それを示す、次のような神話的伝承が存在する。

保津村へ始めてやって来られた神様は請田神社の美保津姫命で、丹波一面が海のやうになっていたのを、山を砕き海を埋めて一筋の川を開かれた。そこで、姫の御名、美保津姫命の保津を取って村及び川の名とし、

由来保津村、保津川と称して今日に至っている。因みに請田神社は古来松尾神社とも称せられ、その実際の祭神は大山咋神で、字岩尾に鎮座し、保津川の急湍に臨む形勝の地を占め、明治六年に村社に列した²²⁾。

排水が困難で、遊水池を出現しやすい環境は、神話的には「海のように」として知覚されていた。そして排水口となる保津川は神が開いたのだと。確かに、保津川は亀岡盆地の水を排水している。次の伝承でも神々の排水事業が語られる。

丹波国の湖の水を全部何処かへ流してふと、その跡に平地が出来て、五穀が実るといふので、請田神社、鍬山神社、持籠神社の三柱の神様が、保津の谷川へその水を流す方法に就いて種々相談せられた。その結果、仕事の費用は全部請田神社が引き請けられ、その代りに鍬山神は鍬で、持籠神は持籠で、それぞれ仕事をせられたと伝えられている²³⁾。

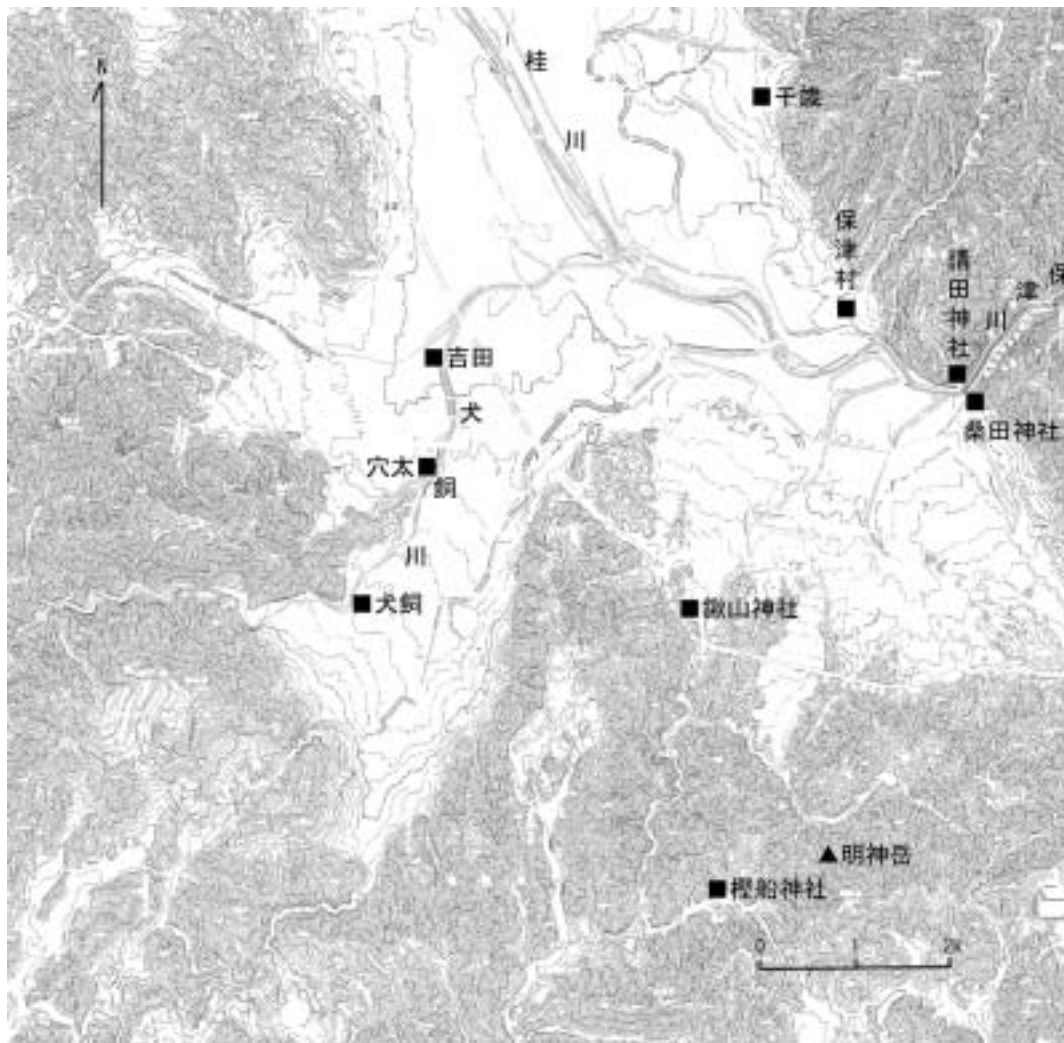
第2図の請田・鍬山・桑田（旧請田大明神）の神々が亀岡盆地を開拓した神話である。まさにこれら社の取り囲む地帯が、遊水池となる。このようにこの神話も亀岡盆地は湖だったと知覚している。つまり、科学的データとしての亀岡の地形環境と、神話的伝承に見る知覚環境とが、ある程度の類似を示しているのだ。

さて、このような地域で、先に示した、世界の洪水神話のⅠ～Ⅳの筋や諸要素を、現在にまで残る伝承群に、見いだすことができるのだろうか。

ここまでで紹介した二つの伝承は、亀岡盆地が海や湖であった、そしてそれを排水して、今のように、居住あるいは農耕が可能な土地になった、そしてそれは神々の仕業なのだ、と読める。この盆地に居住することとなった、起源伝承（Ⅳ）だと考えられる。

この一連の亀岡盆地の起源伝承には、箱船（a）を示唆する語りがあ

亀岡は大昔湖で、亀山城址の辺りは島であった。大国主命が榎田村字田能に祀ってある榎船神社から船を借りてこの湖を切り開かれた際、湖中に大蛇が棲んでいたため、命はそれをお平らげになって無事に亀岡の地を開拓されたと云われている。亀岡町の氏神である鍬山神社の例祭に出る山車の一つが、舟を型どったも



第2図 亀岡盆地の水系と伝承地

ので、而もその舟の下部に水が飛び散って居る様が描いてあって、その水玉が青色と赤色とに塗ってあるのは、如上の伝説に根拠を置くもので、赤色は即ち大蛇の血を表すものである²⁴⁾。

この湖に大蛇が棲んでいた、とあるのは、世界神話の比較の視点から見ても、深層心理学の視点から見ても興味深い。なぜなら、第1図のインド②の『マハーバーラタ』の洪水神話には、ナーガ（竜王）が水中にいたし、新しい土地に家を建てる時、最初に儀礼として杭を打つのは、ナーガの頭を押さえるためだとされているからである²⁵⁾。また深層心理学では、新しい土地に居住を決めたとき、そこにウロボロス（龍やドラゴン、大蛇）を人々は投射する、と指摘しているからである²⁶⁾。つまり洪水神話と新しい土地の開拓を、ウロボロスというシンボルが、取り持っているのである。そのウロボロスが亀

岡盆地の伝承にもいた。

次の一連の伝承は、弘法大師の伝承だが、Iの神の怒りを思わせる。

往事、保津川の支流、犬飼川のほとりを弘法大師が通られて或る百姓家で飲み水を所望されたところが、その百姓家は之を断った。そこで大師は仕方無くすごすごとその家を立去られたが、それから以後と云うものは、犬飼川は水の不要な冬の時期には下流まで沢山水が流れて来るが、さて肝心な水の入要な夏の季節には一滴も流れて来ないと云う事である。そして之は大師の祟りだと云って今更乍ら懼れられて居る²⁷⁾。

神が姿を人間に変え、人々の所行を視察する。この件は、世界の洪水伝説に数多く見られる。中国にも似た伝承がある。第1図の世界の洪水神話比較で見た中国②の

伝承には、「太古、天神が人類の心の善し悪しを試すために、神仙を下界に遣わした。そこで神仙は杖にすがる猫背姿の乞食に身をやつし、各地を遊行した」とある。この伝承は雲南省のもので「阿晋多莫的故事」と呼ばれている。乞食姿に身をやつした神仙が、亀岡の弘法大師のように、家々を巡るのだが、だれも善を行えない。しかし、一人だけが乞食に恵む。そしてその男だけが神の怒りとしての洪水を免れ、船に乗り、生き残り、神婚し、人類の始祖となる。

この神仙はあちこちと家を訪ね、視察を行っているが、弘法大師も、亀岡のいくつかの場所を巡ったようだ。例えば亀岡の吉田²⁸⁾、曾我部町穴太²⁹⁾、千歳³⁰⁾にもある(第2図)。これら伝承は、神の怒りによって、洪水が起きたとしているのではなく、どちらかと言えば、水が無くなった、あるいは水が汚くなって使えなくなったとする、いわば、正反対の結末になっている。が、水に関わる罰であることは、同じだ。

ちなみに弘法大師とは、8世紀から9世紀に実在した、真言宗の開祖、空海のことである。日本民俗学では、この伝承を、本来はやはり、神巡遊の神話であったものが、弘法大師の諸国巡錫の伝説へと仏教的に変容したものともみている³¹⁾。であれば、亀岡盆地のこの伝承も、もとは大国主命や美保津姫命の話であった可能性がある。なぜなら『常陸国風土記』にある「神巡遊」の神話は、大物主神を信仰して日本を統一した、崇神の頃とされているからである³²⁾。『日本書紀』によると、大国主神は、別名を大物主神と言う、とある³³⁾。つまりこの神を使って、新天地を開拓したとする起源神話が、有効であった時代と考えられるからである。これら伝承を「I 神の怒り」、としてもいいだろう。さらに『日本書紀』で美保津姫命の記事を捜すと、大物主神の妻とある³⁴⁾。つまりIIIの神婚関係にあるのだ。

ところがこの弘法大師の伝承を、地元の人たちに聞くと、不可解だという。なぜなら、弘法大師を信仰しているのに、なぜ私たちに祟るのだと。さらに彼らは言う。弘法大師がこのような悪さをするはずがないと。この伝承だけを取り出せば、確かにそうかも知れない。しかし、この彼らが不可解と思うこの伝承、先の洪水神話の一要素

として見たとき、話の筋が通るのである。

さて、やはり日本の神話的伝承には洪水がないのか。次の伝承は、この亀岡盆地の一連の起源神話の伝承ではないが、地名と稲の起源を語っている。

かつてこの付近一帯に大洪水があった折に、現在の曾我部村字穴太の地へ穂の出た稲が一本流れ着いて、それが桑の樹の幹に出来ていた洞穴の中に根を下ろした。所がやがてその稲から非常に質の良い米がとれたので、其後この地方一帯の農家はその種をとって自家の稲の種とした。それで桑田郡という地名が起こったのである。又洞穴に稲が生えていたと云うので、穴太という字の名もつけられた³⁵⁾。

このように洪水が多発する特定地域を軸に据え、そしてその伝承群を見渡すことによって、第3図のような、ある程度の洪水神話的伝承が見いだせることが分かった。

V. 日本神話に見る洪水、あるいは排水

日本神話には、世界の洪水神話に見られる要素としての話型が、いくつか伝承されていた。一つは、「兄妹婚始祖型」と言われるもので、イザナキ・イザナミによる国生み神話であることは、先に述べた。その他には、「生み損ない型」といわれる、その婚姻によって生まれた子が、生み損ないだったとされる話型がある。これはヒルコの伝承で、次に生まれた淡路島も子に数えないとする伝承である。この話型は、中国にもある。さらに「古い型」が続く。その生み損ないの原因を天神が占う話型だ。この型は、ギリシア神話で、洪水後生き残った男女が神の意志を占うのと似ている。そして「柱巡り型」である。これはイザナキ・イザナミが逆方向に天の御柱を回った話である。中国にも似た伝承がある。しかし、洪水があったとの伝承は欠如する。しかし、国生みは海で行われた。それは、先の亀岡の伝承と似ている。洪水ではなく、その後の景観として、海あるいは湖が存在している、と知覚されている点が似ているのだ。

亀岡盆地の伝承群 : I 神の怒り + II 洪水 + a 箱船 + III 神婚 + IV 起源

第3図 亀岡盆地の伝承群と洪水神話の比較

洪水神話は、同時に起源神話でもある。知覚地理学の視角から見たとき、そのことの方が実は興味深い。なぜなら、起源神話とは、結局は、そこに人々が住み始めた起源を伝承しているからである。かつて人々は、どのような土地を、開拓そして居住に価する環境だと知覚したのか、それを伺い知ることができるからである。

奈良盆地には、日本を最初に統一した大王の神話がある。王権の起源神話と言っても良いだろう。先にも少し述べたが、『日本書紀』『古事記』ともに、その王は崇神だとしている。その神話は、大和に蔓延する疫病から語られる。その原因と対策を知るべく、夢占いをした崇神のもとに、大物主神が現れ、私を祀れば、神の怒りは消え失せるだろう、と告げる。その後、神婚神話が語られ、崇神の国土支配の物語が続く。そして崇神は「初国知らす天皇」の称号を得る³⁶⁾。この神話の筋を第4図のように、示すことが可能だ。

洪水という災害は、疫病にも置き換えられる。が、この奈良盆地も洪水が起こる環境なのだ。第5図は奈良盆地の水系図だが、見てわかるとおり、大和川は多くの支流を集めて、亀ノ瀬峡谷を西へ流れ出る。奈良盆地の大和川の本・支流は、規模が似ていて、これらが盆地底で放射状に合流し、豪雨時には、ほぼ同時期に盆地底に河川水が集中する。そして亀岡盆地同様に、排水口が狭く、盆地底に水が溜まることになる³⁷⁾。

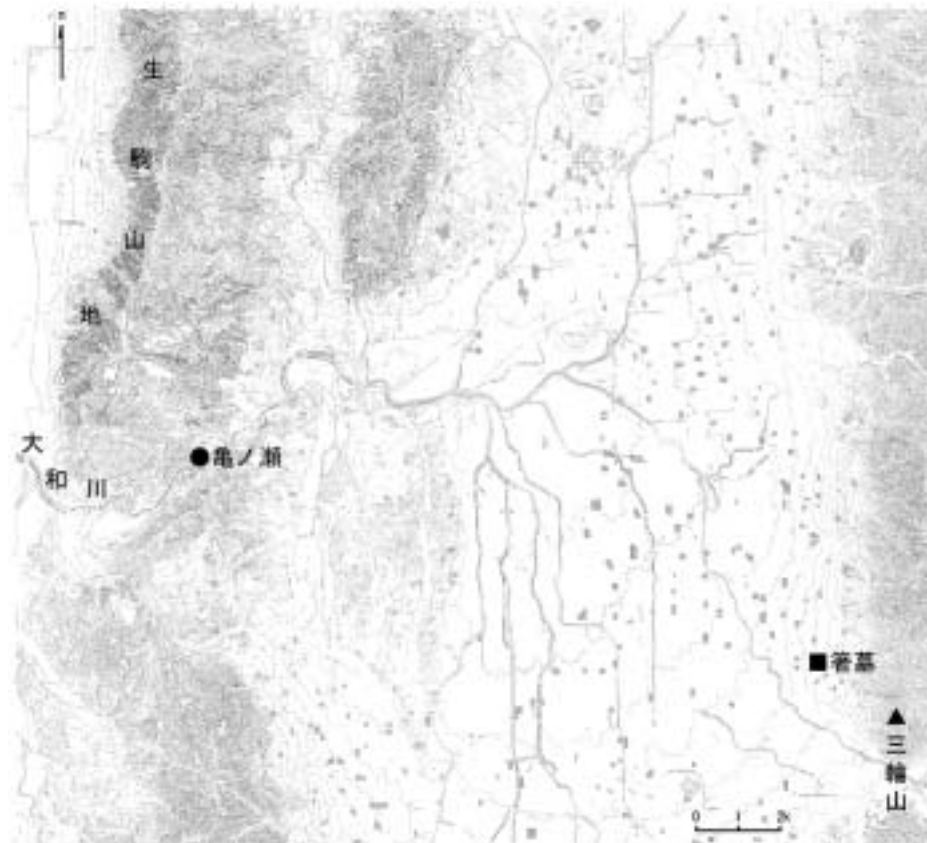
この王権起源神話で語られる神婚神話には二種類あるが、そのうちの一つである「箸墓型」を、この盆地の排水の隠喩であるとする興味深い説がある³⁸⁾ほど、奈良盆地は洪水が多かった。

もう一つ、地域に根ざした起源神話をあげてみよう。

古老の伝へて曰へらく、近江の国伊香の郡。興胡の郷。伊香の小江。郷の南にあり。天の八女、俱に白鳥

崇神の王権起源神話：Ⅰ神の怒り＋Ⅱ疫病 ＋Ⅲ神婚＋Ⅳ起源

第4図 崇神の王権起源神話と洪水神話の比較



第5図 奈良盆地の水系と伝承地

と為りて、天より降りて、江の南の津に浴みき。時に、伊香刀美、西の山にありて遙かに白鳥を見るに、其の形奇異し。因りて若し是れ神人かと疑ひて、往きて見るに、実に是れ神人なりき。ここに、伊香刀美、即て感愛を生して得還り去らず。窃かに白き犬を遣りて、天羽衣を盗み取らしむるに、弟の衣を得て隠しき。天女、乃ち知りて、其の兄七人は天上に飛び昇るに、其の第一人は得飛び去らず。天路永く塞して、即ち地民と為りき。天女の浴みし浦を、今、神の浦と謂ふ、是なり。伊香刀美、天女の弟女と共に室家と為りて此処に居み、遂に男女を生みき。男二たり女二たりなり。兄の名は意美志留、弟の名は那志登美、女は伊是理比咩、次の名は奈是理比賣、此は伊香連等の先祖、是なり。後に母、即ち天羽衣捜し取り、着て天に昇りき。伊香刀美、独り空しき床を守りて、吟詠すること断まざりき³⁹⁾。

この伝承は、滋賀県の余呉湖を舞台としている。天女と結婚した男のなした子らが、後に伊香連の始祖となる話である。日本では羽衣伝説として知られ、全国に分布している。つまりⅢの神婚、そしてⅣの始祖神話の要素を持つが、Ⅰ神の怒りとⅡ洪水が欠如しているわけだ。しかし、この伝承は、先に示した、第1図、中国②の洪水神話の後半部分に極めて似ている。中国の伝承では、洪水後生き残った男が、白鶴になって舞い下りた天女に出逢い、その羽衣の下にかくれて、共に昇天し、結婚した後、農耕牧畜を天から持ち帰り、民族の始祖となる。白鳥と白鶴、羽衣、始祖の部分は、もとは同じ伝承であったのではないかと、疑うほど酷似している。第6図のように表記することができる。

実はこの伝承も亀岡の弘法大師と同様に不可解だ。天女の羽衣を盗んだ男、その男との無理な結婚、その後の妻の逃亡、そして始祖伝承。名誉なはずの話が、そうとも思えないからだ。しかし、Ⅰ・Ⅱが欠如したために、不可解となったのだ、と考えれば、始祖神話として筋が通る。やはり日本の神話には、最初あったはずの洪水が、なぜか欠如しているのだ。欠如に意味があるのであれば、やはり伝承の舞台の自然環境をはじめとする、地域性に

みる必要があるだろう。

余呉湖は現在も水をたたえているが、実はかつてはもっと広く、第7図に示すように琵琶湖の近くまであったとされている。したがって図の伊香具神社の前は、湖だった。その湖を排水して可耕地としたのが、伊香郡を開拓した伊香連だったのだ。

稲作は、中国大陸から朝鮮半島を経て、その技術を持つ集団と共に日本に渡ったのではないかと、考えられる。稲作は水田が必要で、水田は水をプールするための平坦地が必要となる。そのような場所は、もともと湖沼で水を排水したような場所が適地となる。その排水には技術が必要なわけだが、それは稲作に熟練した集団によってなされたであろう。余呉湖には新羅崎神社があり、古代朝鮮の新羅との関連が指摘されている。つまり渡来系の集団によって余呉湖が排水され、開拓されたのではないかとの説が成り立つのだ。

このように、三つの神話は、盆地の湖沼を排水する伝承ととらえることが可能である。つまり日本神話における洪水の欠如は、神話の語られる自然環境と深く関わっていたのである。このような地域では、むしろ伝承の力点は洪水の結果としてのその後の景観、つまり溜まった水を排水することにあつた。特に稲作を行う地域では、排水は地域の開拓を意味するのだから。

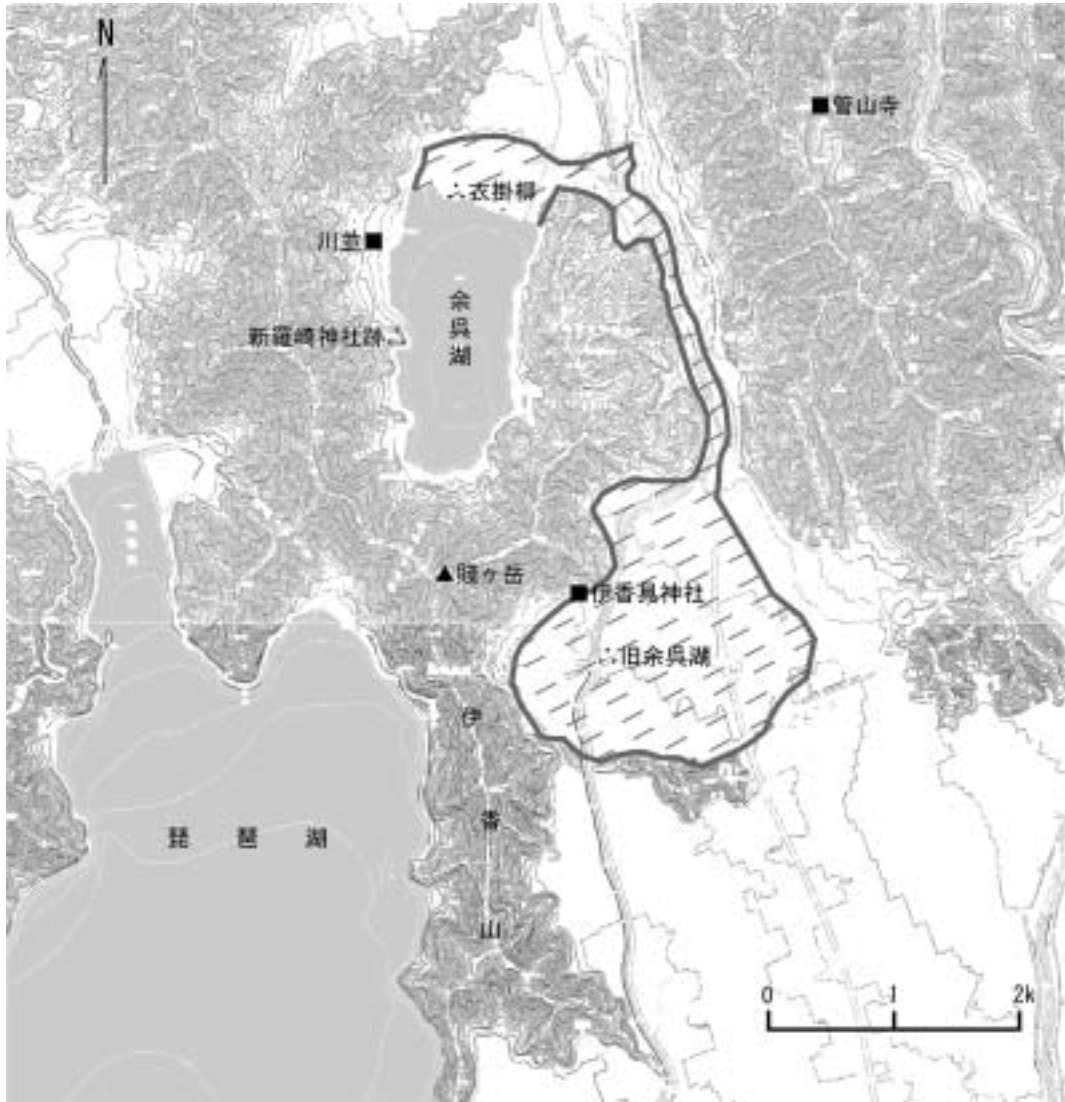
VI. カオスからコスモスへ

実はギリシアの洪水神話も似たような盆地で伝承されていた。この神話の舞台となるのはテッサリア盆地である(第8図)。この神話の紹介に際して、フレイザーは、歴史の父、ヘロドトスの伝承を引用する。大昔テッサリアは大きな湖か内海で、四方を、オリュンポスやオテリスなどの高山に囲まれており、堰き止められていた河水を排水すべき出口がなかった。その後、テッサリアの伝承によれば、地震を起こす海神ポセイドンが、テムベ峡谷を切り開いて、山々を貫く湖の出口を造り、水を排水したのだと。

亀岡盆地では、神婚関係にある、大国主命と美保津姫命が、奈良盆地でも、同じく神婚関係にある、大物主神

伊香連の始祖神話 : +b鳥+Ⅲ神婚 +Ⅳ起源

第6図 伊香連の始祖神話と洪水神話の比較



第7図 想定旧余呉湖と伝承地

と倭迹迹日百襲姫命（箸墓の伝承）が、余呉湖でも天女と男の間にできた子、伊香連が、盆地に溜まる湖を排水した。そしてそこを可耕地としたのである。フレイザーは、このような土地での、洪水神話を次のように言う。「このようにして湿と乾との交代を、つまり海のように青々と水をたたえた広い湖と黄ばんだ小麦の広い畠との交代を幾度もこうむった溪谷においては、大洪水があったという伝承を軽々しく無視することはできない。それどころか、あらゆることが組合わされて、洪水があったかもしれないという蓋然性を肯定する⁴⁰⁾」と。

このようにギリシアの洪水神話も、私たちの神話と類似する自然環境にあったのだ。それだけではない。神が降臨するとされる聖なる山も存在する。奈良盆地では三輪山（第5図）、亀岡盆地では明神岳⁴¹⁾（第2図）、余呉

湖では賤ヶ岳を中心とする、伊香山（第7図）、そしてテッサリアでは、あのオリュンポスが。

このように、類似する神話には類似する景観要素が見いだせる。筆者は、三輪山の神婚神話について、日本全国に分布する伝承と景観の関係を指摘したことがある⁴²⁾。そこでは、①新しい土地の開拓、②新しい権力の樹立、に際し、古代人は神話に従って景観を見立てていたのではないかと、という点を知覚地理学の立場から論じた。

ここでも同様の視点から、神話と景観の関係を論じることができる。稲作の技術を持つ集団は、先住民とは異なる価値観を持って、新しい土地に臨んだ。先住民達が捨て去ったような湖沼のある湿地帯を、神から得た貴重な土地だと考えた。その判別方法は、もしかしたら、次



第8図 ギリシアのテッサリア盆地と伝承地
(原図は Geo Center の Euro Map, Greece, 1999)

のようなことだったかも知れない。それは鳥が餌をついばめるような湖沼であると。メソポタミアの神話には「最後に鳥を放つと、そのときにはもう水が引いていたので、鳥は食べものを漁ってカアカア鳴き、泥の中を喜んで転げまわって、帰ってこなかった」とある。そのような場所は水も浅く、土地は稲作向きの平坦地である。

世界の洪水神話を見ていると、先に指摘したように、鳥が常に重要な役割を演じていることに気づく。メソポタミアや『聖書』では、箱船で生き残った始祖が、鳥を放ち、その鳥が帰ってこないことで、水が引いたことを知る。そこで彼自身も、その土地に定着することを、決めるのだ。これは定着場所の選定要因だ、と考えて良い。インドの神話では、男はなぜか姉妹と雄鶏を箱船に乗せている。納西族の「人類遷徙記」では、白鶴が、余呉湖では白鳥が、その場所に降り立ち、男をそこへと誘う。そして夫婦となり、定着し、始祖となる。つまり鳥が定

住の意志決定に重要な役割を演じているのだ。そのような場所は、水が浅く溜まった状態にある、未開拓の場所だったのだろう。

そのような水が溜まった状態を、洪水の後の景観と見立てたのかも知れない。このようなカオス状態の場所を、耕作地や集落といった、コスモスへと変えていった人々が、現在の諸地域を形作った、始祖だったのだ。このようにまとめると、災害知覚研究の疑問である、なぜ災害、ここでは洪水のある土地に、人々は住んでいるのか、という問いに、この神話群が答えてくれているのではないか。新しい技術を持った祖先たちは、あえてカオスと化した場所を選び、そこを開拓し、定着していったのだ。そのような行動を支えたのが、神話に基づく場所イメージだったのではないか。

最初にも述べたが、人々は、その時代時代の信ずる何かに、頼って生きるしかない。私たちから見れば荒唐無

稽な神話も、彼らにとっては、紛れもない真実だったのだ。現代の私たちの価値体系では、決して理解できない環境知覚を、彼らは神話にもとづき行っていた、とは考えられないだろうか。

注

- 1) Tuan, Y.F., *Perceptual and Cultural Geography: A Commentary*, *Annals of the Association of American Geographer*, 93-4, 2003, 878-881p.
- 2) Jordan, T.G., Domosh, M. and L. Rowntree, *The Human Mosaic: A thematic Introduction to Cultural Geography*, Longman, 1997, 3-35p.
- 3) Saarinen, T.F and Sell, J.L., *Environmental Perception, Progress in Human Geography*, 4, 1980, 525-548p.
- 4) 菊池利夫『歴史地理学方法論』大明堂、1977、145頁。
- 5) 前掲2) 256～257頁。
- 6) B・マリノフスキー『呪術・科学・宗教・神話』人文書院、1997、131頁。
- 7) R・ウィリアムズ『キーワード辞典』晶文社、1980、250～252頁。
- 8) A・サミュエルズ他『ユング心理学辞典』創元社、1993、87～88頁。
- 9) M=L・フォン・フランツ『世界創造の神話』人文書院、1990、7～28頁。
- 10) 佐々木高弘『民話の地理学』古今書院、2003、141～207頁。
- 11) 前田護郎編『聖書』中央公論社、1978、68～72頁を要約した。
- 12) J・G・フレイザー『洪水伝説』国文社、1973、15～30頁。
- 13) 「ギルガメッシュ叙事詩」(吉田敦彦「洪水・始祖伝説一印欧を中心に」『日本伝説大系 別巻 1』みずうみ書房、1989、410～411頁)。
- 14) フェリックス・ギラン『ギリシア神話』青土社、1991、39頁。
- 15) ビール族の神話。前掲13) 414～415頁。
- 16) 山際素男訳『マハーバーラタ 第二巻』三一書房、1992、228～238頁。
- 17) 雲南省の神話。伊藤清司『昔話 伝説の系譜—東アジアの比較説話学』第一書房、1991、66～68頁。
- 18) 納西族の神話。君島久子「天女始祖型洪水説話の周辺」『日本伝説大系 別巻 1』みずうみ書房、1989、386～387頁。
- 19) 大林太良・吉田敦彦監修『日本神話事典』大和書房、1977、144～145頁。
- 20) J・G・フレイザー「洪水物語の地理的分布」前掲12) 172～179頁。
- 21) 亀岡市編さん委員会編『新修亀岡市史 本文編第一巻』1995、94頁。
- 22) 田中勝雄「地名起源伝説と動植物伝説—統南桑民譚雑録一—」『旅と伝説』第十卷九号、三元社、1936、70頁。
- 23) 田中勝雄「動植物と社寺に関する伝説—南桑民譚雑録三—」『旅と伝説』第九年第十二号、三元社、1936、45～46頁。
- 24) 田中勝雄「山水伝説—統南桑民譚雑録二—」『旅と伝説』第十年第十号、三元社、1937、43頁。
- 25) M・エリアーデ『永遠回帰の神話』未来社、1963、29～30頁。
- 26) 前掲9)。
- 27) 前掲24) 46頁。
- 28) 同、46頁。
- 29) 同、46頁。
- 30) 前掲22)、77頁。
- 31) 大塚民俗学会編『[縮刷版] 日本民俗事典』弘文堂、1992、249～250頁。
- 32) 「常陸国風土記」、秋本吉郎校注『風土記』岩波書店、1958、39～40頁。
- 33) 井上光貞監訳『日本書紀 上』中央公論社、1987、124頁。
- 34) 前掲33)、144頁。
- 35) 前掲22)、69頁。
- 36) 前掲33)、212～222頁。三浦佑之訳『口語訳 古事記』文芸春秋、2002、157～165頁。
- 37) 吉越昭久「奈良盆地の水系」、奈良地理学会編『大和を歩く』奈良新聞社、2000、16～17頁。
- 38) 上田 篤『空間の演出力』筑摩書房、1985、195～221頁。
- 39) 「近江国風土記逸文」、前掲32)、457～458頁。
- 40) 前掲12)、60頁。
- 41) 明神岳には次のような神話的伝承がある。「大昔口丹波が湖水であった頃に、大国主命が多くの神々をこの山の頂に集められ、篠村の山本と保岡村の請田との間を切り開いて湖を平野にし、町や村を拵へようと相談せられた処だそうである」(前掲24)、37頁)。このことから明神岳を、亀岡盆地における、神々の降臨する聖山、と考えて良いだろう。
- 42) 前掲10)。